

## まえがき

ヨーロッパでは1980年代以降の過去30年間で急進的な反エリート、反既成勢力、移民排斥、自国民優先と福祉ショーヴィニズム、反イスラムを主張する極右・急進右翼政党が劇的に勢力を拡大してきた。一部の国では、それらの政党が穏健化戦略を採用し、選挙で成功し、政権に参加するに至っている。その政策と主張、行動、スタイルは従来の「極右」という概念よりも、ポピュリズムという概念で捉える方が的確に分析できるという見方が広がっている。

極右政党だけでなく、サッチャーやブレア、サルコジやベルルスコーニなどの既成の保守政党や社会民主主義政党、中道・右派政党のリーダーシップ、政治的コミュニケーション、政治スタイル、組織形態に関しても、ポピュリズムと捉える方が適切な側面も現れている。この現象の出現は、敵視の対象としての移民問題を抱える西欧だけではない。少々相違点もあるが、米国ではティー・パーティーという草の根運動、日本では「地方ポピュリズム」や日本維新の会など諸々の新政党の誕生という形で類似の政治現象が起こっている。

現代の政党やデモクラシー研究では、1990年代以降、政党の衰退、代表制の危機、執行権力の強化、政治の大統領制化などの形でデモクラシーの危機が論じられてきた。世界経済のグローバル化は相互依存による内外の政治・社会・経済の安定化をもたらすのではなく、摩擦と不安定化、ナショナリズム、ローカリズム、ポピュリズムの興隆と「再国民化」をもたらしている。

19～20世紀のデモクラシーの形成と発展の前提は、主権国家、同質性を仮定された「国民」、国民経済の存在であった。21世紀の今日では、これらの前提がすべて危うくなり、揺らいでいる。この動揺の下にある人々と国家を統合あるいは接合しようとしてポピュリズムがデモクラシー諸国に蔓延している。

ポピュリズムは、歴史的には19世紀末の米国の人民党 (People's Party) を第1の源流としている。農民層を中心に一部の労働者を巻き込み、債務軽減や独占の規制等を要求したこの運動は、当時の2大政党では満たされない新しい政

治を求める声を反映したものであった。しかし、その後民主党がこれらの新しい政治の要素を取り込み、その結果、第3党運動は消滅した。

政治学におけるポピュリズム研究に大きな影響を与えたのは、第2の歴史的源流、すなわち1940～50年代のアルゼンチンのペロン、メキシコのカルデナス、ブラジルのヴァルガスなど、南米での大衆的な支持を得た権威主義体制である。その特徴は、ナショナリズム、大衆政治、個人的リーダーシップである。それは、工業化の中間段階および民主主義の形成期において、労働者階級の政治的・社会的統合を図ることによって、自国の工業化の推進をめざす「国家、労働者階級、工業ブルジョアジーの同盟」と位置づけられ、「古典的ポピュリズム」あるいは「政治体制論としてのポピュリズム」と評されてきた<sup>1)</sup>。

1980年代末から90年代初頭には、同じく南米でペルーのフジモリ、アルゼンチンのメナムなどが、既存の政治制度、特に政党を迂回して、人民に直接訴えかけることによって、政権を運営・掌握する新たな現象が生じた。新自由主義経済政策への移行過程で登場したこの政治現象・政治スタイルは「ネオ・ポピュリズム」と呼ばれた。この頃までは、ポピュリズムはもっぱら、デモクラシーと政党政治が未発達な発展途上国の現象と捉えられていた。

しかし、1980年代以降、西欧の先進工業国・デモクラシー国家で類似の、しかし新たな質を持った2種類の現象が見られるようになった。その1つは、イギリスのサッチャーが先駆者である。彼女は、そのアウトサイダー的資質・出自を生かして、福祉国家、労使の合意という保守党・労働党の「戦後コンセンサス」を破棄し、労働者階級の闘争基盤を分裂・解体させ、「普通の人々」「国民」「人民」に訴えかけて、支配体制の再編成に成功した。これを、ホールは「権威主義的ポピュリズム」と名づけ、ラクラウは「支配階級のポピュリズム」と規定した<sup>2)</sup>。このような既成政党の政治スタイルとしてのポピュリズムは、ブレアをはじめ諸政治指導者に継承され、他国にも拡大・定着した。

もう1つは、従来は政治システムの外にいた右翼勢力のポピュリズム政党への変容と台頭である。1990年代後半以降、イタリア、オーストリアやオランダでは、旧来の極右政党が議会制民主主義と自由主義原理を受容し、穏健化し、政権に参加した。また、他の国でも旧来の暴力行動と反体制イデオロギー一辺

倒でなく、移民問題、法と秩序、失業や家族問題など具体的な政治・経済・社会問題を積極的に取り上げ、「人民」への主権の返還、反政治、反エリートを唱えつつ、議会勢力として活動する極右・急進右翼政党が次々と登場し、議会に進出していった。そのイデオロギーは全体としては新自由主義的というよりも、反グローバリズムの傾向が強い。これらの政党は2000年代に入ってヨーロッパ各国でいっそう勢力を拡大し、西欧デモクラシーの根底的な再考察を迫っている。これが、本書が主な対象とするポピュリズムである。

本書は、西欧におけるこのような状況を「ポピュリズム時代におけるデモクラシー」として捉え、現代デモクラシーの問題点と課題を明らかにすることを企図している。それゆえ、本書はポピュリズム論の一般的な検討にとどまらず、ポピュリズムの理論的整理と各国ポピュリズムの実証的な分析を行っている。第I部では、デモクラシーの現在状況とポピュリズムの関係、極右・急進右翼とポピュリズムの関係、ポピュリズムを超える道としての市民社会強化戦略を論じている。第II部では、ポピュリズムが顕著な、あるいは新たな特徴を示しつつあるドイツ、フランス、イギリス、イタリア、オーストリア、スウェーデンの6ヶ国を取り上げ、比較による理解を可能にした。また、歴史的な先例としてフランスのブジャード運動の分析を入れた。これらの点で、本書は日本語による西欧ポピュリズム研究としては類書がないと自負している。

本書がデモクラシー研究やポピュリズム研究に寄与し、さらには、ポピュリズムの克服と民主主義の発展の道を模索する人々に、何らかの手がかりを提供することができれば幸いである。

- 1) 松下列 (2003)「ラテンアメリカの政治文化——ポピュリズムと民衆」歴史学研究会編『国家像・社会像の変貌 現代歴史学の成果と課題1980-2000年 II』青木書店、312-326頁。
- 2) Hall, Stuart (1980) "Popular-Democratic vs Authoritarian Populism: Two Ways of Taking Democracy Seriously", in Hunt, A. ed. *Marxism and Democracy*, London, Lawrence and Wishart, pp.157-185. ラクラウ, エルネスト (1985)『資本主義・ファシズム・ポピュリズム——マルクス主義理論における政治とイデオロギー』横越英一監訳、拓植書房、176頁。

高橋 進